

書 評

永井隆長崎医科大学博士遺著『長崎の鐘』再読 —被爆80年と被団協ノーベル平和賞の時空間から—

創価大学大学院国際平和学研究科客員教授 田 中 福一郎*

被爆80年の節目を越えた現代——。被爆当時、放射線医師として地獄さながらのなか犠牲者救護に全力を尽くし、数年後に白血病で逝去を遂げた長崎医科大学医師永井隆博士——。その遺著「長崎の鐘」（『永井隆全集 全一卷』講談社、1971年刊）につき、私自身の外務省核軍縮実務経験も踏まえ、その研究者の一人として読み直す僅かながらの予備的論考を、玉井秀樹本学平和問題研究所長、小出稔本学大学院国際平和学研究科長のご高配を賜り記させて戴けることに深謝申し上げる次第である。

はじめに、作者による次のような語りかけを、「ウクライナ戦争による核危機の忘却の終わり」という現実に気づかされた今こそ、深く傾聴したいと思う。

— 「八月十日の太陽は、いつものように平凡に金毘羅山から顔を出したが、その光を迎えたのは美しい浦上ではなくて、灰の浦上であった。生ける町ではなくて死の丘であった。工場は無造作に押し、ひしゃがまれて煙突は折れ、商店街は瓦礫の浜となり、住宅地はただ石垣の段ばかり、畑は禿げ、林は燃え、森の巨木はマッチを並べたように倒され、満目荒涼、犬一匹生きて動くものはない。夜半突然火を発した天主堂が、紅蓮の焰を上げて最後のピリオドを打っている。」 —

つづいて、永井博士は、つぎのように問う。

— 「この放射原子雲の流れゆく果ては何処か。前途は凶か吉か？ 正か、

はたまた邪か？」

そして、

— 「私は放射能雲の妖しく輝いて低迷する空を胸のつまる想いで眺めていた」 — としている。

この歴史の証言をもってして、博士が実体験された長崎の原爆被爆の実相は壮絶である。本著は、まさに医師としての倫理と医療使命感、被爆の惨状の記録、そしてそれを超えた祈りの視点を記すことで、沈黙しがちだった被爆体験を日本社会へ掘り起こした著作に外ならないものとする。

私の義父は山口県で四十余年の小学校教員を務めていた。そのことも縁であるからか永井博士の話をしてきていた。私はその義父の思いも胸に、いま本学教員として講義科目に世界市民教育演習を担当し、原爆被爆と核廃絶につき私と同じ戦後生まれの学生に語らせていただいている。

私の科目は全学部共通であるため様々な関心を持った学生が聴講しており、その中に、中学生の頃からロシア文化に興味を惹かれロシア語を学んできているという女子学生がいた。

ある日、彼女から今のロシアとウクライナについて自身が書いたエッセイを私に読んでほしいと手渡された。引き込まれて読んでいるうちに私はその中の次の一文に目頭が熱くなった。

「いままでにロシアにいる11人の友人がウクライナ戦争に行った。多すぎると私は思っているのだが、状況が完璧に解るわけではないので、この人数は多くはないのかもしれない。直近で戦争に行った友人は私とほぼ変わらない歳だ。絶対に帰ってくるから、また話そうねと言って。未だに、戦争に行く彼らになんて声をかけていいかわからない。何人かは死亡した報告が友人のグループから来た。私がひとりひとりのことを語るができるときはいつになるだろう。私はただ、彼らにロシア語をおしえてもらって、日本語を教えて、楽しく話をしていたかっただけだ。笑い合っていたかっただけ。」と。

その女子学生の異国の友人を想う言葉が私の脳裏を離れない。まさに、戦争ほど悲惨なものはない。戦争ほど残酷なものはない。長崎の被爆の実相とウクライナ戦争の実相が私の胸奥に交差して響きわたる。

永井博士は爆心地に近い長崎大学医学部棟で被爆。右側頭動脈切断の重症を負いながら被爆者の救護活動に挺身した（その後数年後に核被爆症死）。妻は被爆で即死、幼子が残された。

— ちしろ、ちしろ、と虫がなく。抱き寝の茅乃がしきりに乳をさぐる。さぐりさぐって父だと気づいたか、声をころして忍び泣きをはじめた。泣きながらやがてまた寝息にかわる。私だけじゃない。この原子野に今宵いま幾人の孤児が泣き、やもめが泣いていることであろう。 —

永井博士の魂の声を聞くと、わたしたちは本当に手遅れにならないうちに、平和を訴える声をもっと挙げなくてはという思いに心を揺さぶられる。

核戦争の悲劇をただ歴史の一コマの風化にまかせてよいのだろうか。

私自身これまでに積み重ねてきた仕事柄、ある危惧を抱いている。それは総務省統計局のデータで、先の戦争を自らの体験として有している人々（敗戦時10歳以上とする）について日本の総人口に占める割合が、すでに2013年の段階で10%を切ってしまうという状況である。それで果たして次の世代に戦争の実相が正しく伝えられるだろうか。すなわち、今の時代のロシアとウクライナの戦争が日本の戦後世代に実感として惻々と捉えられているだろうか、と危惧されるものである。

一昨年、戦後79年でノーベル平和賞を受賞した日本被団協の平均年齢も、いまや86歳を超えている。まさに核戦争の記憶の継承こそ現世代の残された急務であり責務でなければならないであろう。

そして、まさにこの時において、原爆被爆者の声の結集でもある日本被団協がオスロでノーベル平和賞を受賞したのは、核戦争の記憶の継承がいまこそ世界で求められているからではないだろうか。

すなわち、歴代で最も若いとされる四十歳の平和賞選考委員長の次の言葉に私はその思いを新たにした。

「いつの日か、私たちのなかで歴史の証人としての被爆者はいなくなるだろう。しかし、記憶を残すという強い文化意識と継続的な取り組みで、日本の新しい世代が被爆者の経験とメッセージを継承している。彼らは世界中の人々を

刺激し、教育している。それによって彼らは、人類の平和な未来の前提条件である核のタブーを維持することに貢献している。

2024年のノーベル平和賞を日本被団協に授与するという決定は、アルフレッド・ノーベルの遺言にしっかりと根ざしている。」と。

永井博士は、その遺著「長崎の鐘」最終章の中で、人類は原子時代に入って幸福になるであろうか？それとも悲惨になるであろうか？と問い、次のように吐露している。「人類は今や自ら獲得した原子力を所有することによって、自らの運命の存続の鍵を所有することになったのだ。思いをここに致せば、まことに慄然たるものがあり、正しき宗教以外にはこの鍵をよく保管し得るものはないという気がする。」と。

ここで私は世界桂冠詩人である本学創立者が詩に託して被爆者の思いに生命の奥深くで同苦されていたことに深い感動を禁じ得なかったことを申し述べたい。それはかつて、「平和の鐘 虹光る長崎」という長編詩を長崎の同志に贈られているその心に触れたときである。そのご遺志をここに謹んで抜粋させていただきます。

「平和は
決して与えられるものではない
自らの意志で
自らの手で
額に汗し 語り 動き
岩盤をこぶして砕くが思いで
戦い 勝ち取るものだ

わが心の平和図には
常に長崎があり
あなたたちの雄姿をば
思いえがいて

私は 平和旅を続けた

持続は力だ

蓄積は力だ

一つ一つの行動の積み重ねは

着実にして 間断なき

信念の歩みは

必ずや 壮大な理想の虹を

人類の頭上に懸けゆこう

一波が万波を呼ぶように

波浪が巖を削るがごとくに

ピース・フロム・ナガサキ

長崎こそ

永遠の平和の故郷だ

生命の光彩輝く

歓喜のスクラムを組みつつ

この街に あの丘に

世界の空に

高らかに また 高らかに

平和の鐘を打ち鳴らすのだ

最後に、原爆被爆80年を越えた今このとき、永井博士の「長崎の鐘」のラストフレーズに込められた祈りをもって、この稿の結語に代えさせていただきたい。平和への記憶の継承を願いつつ。

それは「長崎の鐘」すなわち浦上天主堂の廃虚から掘り出された鐘が、平和を祈って鳴り響く場面である。

— 「カーン、カーン、カーン」澄みきった音が平和を祝福してつたわってくる。事変以来長いこと鳴らすことを禁ぜられた鐘だったが、もう二度

と鳴らずの鐘となることがないように、世界の終りのその日の朝まで平和の鐘を伝えるように、「カーン、カーン、カーン」とまた鳴る。人類よ、戦争を計画してくれるな。原子爆弾というものが故に、戦争は人類の自殺行為にしかならないのだ。希わくはこの浦上をして世界最後の原子野たらしめ給えと。鐘はまだ鳴っている。――

* 筆者は前駐ウィーン国際機関日本政府代表部総括公使（ハーグ弾道ミサイル不拡散国際規範委員会政府代表）、元内閣府国立公文書館アジア歴史資料センター次長 / 外務省国際情報研究官 / 英国ケンブリッジ大学大学院 LL.M. 等を経て現職、および本学学士課程教育機構客員教授（東京通信大学平和学客員特任講師 / 日本軍縮学会会員兼任）。専門は国際平和法哲学 / 近代外交思想史 / 比較文明論研究。